View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Nagasaki International University Academic Institutional Repository

長崎国際大学教育基盤センター紀要　第３巻　2020年３月　35頁～46頁

研究ノート

スポーツを専攻する学生へのアダプテッド・スポーツ教育に向けた取り組み

――アンプティサッカー・トップアスリートから学ぶ――

宮　本　　彩[1)]，元　嶋　菜美香[1)]，神　野　周太郎[1)]
熊　谷　賢　哉[1)]，田　井　健太郎[2)]，宮　良　俊　行[1)]
（[1)]長崎国際大学 人間社会学部 国際観光学科、[2)]群馬大学 教育学部）

Education in adapted sports for students majoring in sports

—Learn from top amputee soccer players—

Aya MIYAMOTO[1)], Namika MOTOSHIMA[1)], Shutaro JINNO[1)],
Kenya KUMAGAI[1)], Kentaro TAI[2)] and Toshiyuki MIYARA[1)]
([1)]Nagasaki International University, [2)]Gunma University)

Abstract

The purpose of this paper was to report for education program of adapted sports in Nagasaki International University for 2018. In addition, we aimed to clarify the effects of these educational programs. We conducted two educational programs on adaptive sports and sports for students majoring in sports. One of the programs is to include an opportunity to experience adapted sports as part of the lecture. The other is to create opportunities for interaction with amputee soccer players which are disabled persons. These educational programs have achieved the expected educational effect of understanding the concept of adaptive sports and enjoying disabled sports. Moreover, it is clarify that the students view on disabled sports shifted to positive direction by events to interact with disabled athletes. From the participant's comments, it became clear that they had an opportunity to reconsider the value of sports and the current state of sports education or sports activities.

Key words

Education in adapted sports, amputee soccer, disabled sports

要　旨

本稿は、長崎国際大学にて2018年度に実施した２つのアダプテッド・スポーツ教育活動の報告とともに、その教育効果の検討することを目的とする。アダプテッド・スポーツ教育活動として、①講義の一部にアダプテッド・スポーツを体験する機会を組み込む、②障がい者との交流機会を設ける取り組みを実施した。その結果、アダプテッド・スポーツという言葉や概念を知り、競技を自ら体験して楽しむという第一義の目的を達成することができたと考えている。また、障がい者との交流機会として実施したアンプティサッカー選手を招いてのイベントでは、イベントの前後で実施した障がい者スポーツのイメージ等に関するアンケート調査結果から、参加学生の障がい者スポーツに対するイメージが肯定的なものへと変容したことがわかった。また、参加学生のイベントに対する感想文から、スポーツの価値や現在のスポーツ教育あるいはスポーツ活動の在り方を問い直す貴重な機会となったことがわかった。

キーワード

アダプテッド・スポーツ教育、アンプティサッカー、障がい者スポーツ

Ⅰ　はじめに

来る2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催に向けて、障がい者スポーツへの関心がより一層高まっている。このことは、小池東京都知事がイベントの挨拶や定例会見にて再三に渡って表明している「パラリンピック大会の成功なくして、東京大会の成功はない」という発言からも見て取れる（産経ニュース・特集 小池百合子知事定例会見録［2018年２月24日］）。この背景には、オリンピック以上にパラリンピックが盛り上がり、“史上最高の大会”と称された2012年のロンドンオリンピック・パラリンピック競技大会を越えたいという日本政府ならびに行政の考えがある（小林・平賀［2018：85-86］）。

スポーツ庁ではイギリスの成功例にならい、2015年にオリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議を設置し、2016年７月に『オリンピック・パラリンピック教育の推進に向けて』とする最終報告をまとめた。このなかで、高等教育機関におけるオリンピック・パラリンピック教育の推進方策として、「学生に対する教育においては、各大学の状況や学問分野の特性等を踏まえながら、オリンピック・パラリンピックに関する教育を幅広く行われることが期待される。特に、体育教員をはじめとする教育養成に関わる学部や課程等においては、オリンピック・パラリンピックへの理解のみならず児童生徒への指導方法等も含めた教育の充実を図ることが求められる。また、教員養成学部等以外にも、保健体育をはじめとする一般教養科目でのオリンピック・パラリンピックへの理解を深める学習機会の充実や、学部専門教育におけるオリンピック・パラリンピックを題材とした学習の工夫が期待される。」と記載されている（オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議［2016］）。加えて、2007年の改正学校教育法や2016年の障害者差別解消法の施行により、特別支援教育への対応や学校現場での合理的配慮の提供が必須となる中、大学においても障害理解に向けた教育の充実がより一層求められている。

大学におけるオリンピック・パラリンピック教育ならびに障害理解教育の充実が求められている社会背景を踏まえ、長崎国際大学人間社会学部国際観光学科スポーツツーリズムコースでは2017年度からアダプテッド・スポーツに関する学習機会の提供をめざした取り組みとして、アダプテッド・スポーツ種目の１つであるアンプティサッカー体験会の実施を始めた。アダプテッド・スポーツとは、“障害のある人がスポーツを楽しむために、その人自身と、その人を取り巻く人々や環境を問題として取り上げ、両者を統合したシステムづくりこそが大切であるという考え方に基づくもの”である（矢部［1997：17］）。つまり、その対象は、障害のある人はもちろんのこと、幼児から高齢者、体力の低い人も含まれる（矢部［2004：３］）。なお、本学スポーツツーリズムコースは、人間社会学部国際観光学科の３コースのうちの１つで、スポーツ分野の枠を広げ、その発展普及に携わる人材を育成するコースである。コースに所属する学生は中学校・高等学校一種免許状（保健体育）の取得をはじめ、財団法人日本体育協会公認スポーツ指導者や健康運動実践指導者等のスポーツに

図１　アンプティサッカーイベントの様子

関する指導者やコーチの資格を取得し、スポーツに関連する職場への就職を目指して学んでいる。

そこで、本稿では2018年度に本学のスポーツを専攻する学生を主な対象として実施したアダプテッド・スポーツ教育の活動報告とともに、その教育効果の検討を目的とする。

Ⅱ　アダプテッド・スポーツ教育の活動報告

2018年度に行ったアダプテッド・スポーツの教育活動は、次に示す２つであった。

1．講義の一部にアダプテッド・スポーツを体験する機会を組み込む。
2．障がい者との交流機会を設ける。

この教育活動の設定は、我々が2017年度に本紀要に投稿した「スポーツを専攻する学生のためのアダプテッド・スポーツ教育の充実をめざして」にて示した今後の展開方策に基づき行ったものである。両活動とも、「障害」に焦点化しすぎず、多様な「身体のあり方」を理解した中で、多くの人とスポーツの楽しみを享受することを学ぶ（宮本ら［2018：88］）ことを重要視した。

教育活動１
講義の一部にアダプテッド・スポーツを体験する機会を組み込む

アダプテッド・スポーツ教育の効果に関する報告のうち、曽根［2016：53-62］は、講義内での限定的な導入（３コマ）であったにも関わらず、授業の前後で不平等問題の改善に対する意識や障害のある人も生活しやすい世の中にしなければならないという意識が高まったことを報告している。現在、本学スポーツツーリズムコースでは、アダプテッド・スポーツに関する講義は開講されていない。そこで、講義の一部にアダプテッド・スポーツを体験する機会を組み込むという方策が最も実現可能性が高かったことから、2018年度の取り組みの１つとして、アダプテッド・スポーツの体験を組み込んだ授業を実施することとした。

2018年度は、サッカーの実践や指導方法を学ぶ「球技Ｃ（２年次後期開講・コース選択科目）」において、アンプティサッカーの体験を中心とした授業を実施した（１コマ）ほか、全学共通科目であるスポーツ実習Ａおよびスポーツ実習Ｂにおいても、ボッチャ、シッティングバレー、アンプティサッカーなどのアダプテッド・スポーツ種目の体験を行った（１コマ）。いずれの講義の受講者も、初めてアダプテッド・スポーツを体験するという者が多く、それぞれの競技の技能習得の難しさと面白さを実感した様子であった。また、いずれの種目もゲーム性が高いこともあり、試合形式で実施した際には、大変な盛り上がりをみせた。アダプテッド・スポーツという言葉や概念を知り、競技を自ら体験し、楽しむという第一義の目的は達成することができたと考えている。しかしながら、教育活動１では、実証的データの取得にまでは至っていない。そこで、教育活動２では、障がい者スポーツのイメージ等に関するアンケート調査や参加学生の感想文といった実証的データを収集し、教育効果を検証することとした。

教育活動２
障がい者との交流機会を設ける

大学教育における「障害理解教育」では、障害に関する「知見」を提示するだけでなく、障がい者との「かかわり」の中で考えるプロセスが必要であることが指摘されている（中村［2011：7-8］）。また、山田［2006：18］は、障がい者との空間的・関係的な近接性の違いによって意識の変容の程度が異なり、障がい者と直接的に関係を持つ機会が多いほど、プラスの効果があることを明らかにしている。さらに、塩田・徳井［2016：156］は、障がい者スポーツを通した障がい者との直接交流は、障害理解という面だけでなく、共生・平等意識の形成などの点で効果的に働くことが期待されると述べている。これら先行研究での知見から、本学スポーツツーリズムコースでのアダプテッド・スポーツ教育では、できる限り障がい者との交流機会を設けることとした。2017年度に開催したアンプティサッカー体験会は学外での実施であったため、学生の参加者が７名と少なかった（宮本ら［2018］）。この反省を踏まえ、2018年度はスポーツツーリズムコースイベントである「トップアスリートから学ぶ」の講師としてアンプティサッ

カー日本代表選手５名を招聘し、本学体育館にて開催した（2018年12月９日実施）。

アンプティサッカーとは、上肢あるいは下肢に切断や麻痺などの障害のある人のために設計されたアダプテッド・スポーツの１つである。試合は１チーム７人制で、ピッチサイズは11人制サッカーの約３分の２の広さ（国際基準60m×40m）で行われる。ゴールキーパーは上肢に障害のある競技者が、フィールドプレーヤーは下肢に障害のある競技者が担当する。フィールドプレーヤーは、義足を着用せず、ロフストランドクラッチを用いてプレーを行う。ロフストランドクラッチとは、医療・リハビリテーションや日常生活においてよく使用されている医療用補助器具の１つで、体重を支える握り部分に加え、前腕を支えるカフ（腕支え）が備わった杖のことである。アンプティサッカーは高価な専用器具を用いないため、気軽に楽しめるスポーツとして、ヨーロッパを中心に人気が高まっている種目である（日本アンプティサッカー協会 HP）。

イベント内容は、①アンプティサッカーの歴史やルール等に関する講義（30分）、②アンプティサッカー体験会（90分）、③アンプティサッカー日本代表選手によるトークセッション（30分）であった。

講義は、2018アンプティサッカーワールドカップ・メキシコ大会に帯同スタッフとして参加した筆頭著者が担当した。アンプティサッカーのルール等の種目説明に加え、これまでの日本での競技普及活動の歴史やワールドカップの様子と戦績を、映像資料を基に紹介した。

アンプティサッカー体験会では、参加者を４チームに分け、チームごとにアンプティサッカー日本代表選手による実技指導を行った。その後、チーム総当たりによる交流戦を実施した。体験会終了後に、学生からの質疑応答を基にしたトークセッションを行った。

トークセッションでは、まず初めに「競技を始めたきっかけ」を全選手に尋ねた。「義肢装具士さんから紹介された」あるいは「切断前にサッカーをしていたこともあり、切断後もサッカーがしたいと思い、探していたところ、たまたま新聞記事をみつけてアンプティサッカーを始めた」などのエピソードが語られた。次にイベントに参加した学生から「体験してみて、アンプティサッカーの難しさを痛感したが、みなさんがアンプティサッカーを始めて、いちばん苦労したことは何か」という質問がなされた。この質問に対して選手から、「利き足を切断したため、以前のようにボールを蹴れるようになるまで大変だった」ことや「切断する前に競技としてサッカーをしていたわけではないため、いまでもプレー中にさまざま難しいことがある」こと、また、「義足やクラッチを使用してサッカーをすることへの理解がまだ乏しく、競技する環境が限られているので、練習場所の確保などに苦労している」との回答があった。最後に、チームのサポートスタッフに対して、アンプティサッカーに関わるきっかけや今後の展望について尋ねたところ、「理学療法士を目指すなかで、アンプティサッカーに関わる機会があり、チームの活動をサポートしている。今後も、できる範囲でサポートを続けていきたい」ということであった。

本稿ではこれ以降、このスポーツツーリズムコースイベント「トップアスリートから学ぶ」での教育効果の検討をしていくこととする。

Ⅲ　教育効果の検討方法

１．対　象

調査対象者は2018年12月９日に実施したスポーツツーリズムコースイベント「トップアスリートから学ぶ」に参加した学生75名（運営スタッフを含む）であった。

２．事前・事後調査

⑴　データ収集

障がい者スポーツのイメージ等に関するアンケート調査をイベントの前（アンプティサッカーの歴史やルール等に関する講義が始まる前）とイベントの後（アンプティサッカー日本代表選手によるトークセッション終了後）に実施した。アンケート調査の実施にあたり、調査の概要、記入方法について説明を行い、同意を得たのち、一斉法により実施した。記入した調査票はその場で回収した。倫理的配慮として、無記名にて実施したが、事前調査と事後調査の票を対応させる目的で、学籍番号の記入の協力を

求めた。また、調査への参加に際して、自由意志であり、参加を拒否したことによって不利益を被ることがないことを口頭にて十分に説明した。なお、本調査は本学人間社会学部国際観光学科研究倫理委員会の承認を得て実施した（H29-F06）。

その結果、事前調査への回答者は64名、事後調査への回答者は67名であった。また、事前調査と事後調査の対応が可能だった回答者は57名であった。

障がい者スポーツに対するイメージについては、西垣ら［2012：56］に従い、否定的イメージと肯定的イメージを対にした10項目の質問をプログラムの前後で調査票を用いて質問した。以下に10項目の設問を示す。

① 大勢で楽しめない―大勢でも楽しめる
② 技術向上は望めない―技術向上もある
③ 見ていてもつまらなさそう―おもしろそう
④ スポーツを行う意味がない―とても意味がある
⑤ スポーツを行うのは危ない―危なくはない
⑥ できることが限られてしまう―工夫をすればいろいろできる
⑦ スポーツをするのは難しいこと―簡単なこと
⑧ スポーツをやるべきではない―積極的にやるべき
⑨ スポーツをする環境が作れない―環境を作ることができる
⑩ 健常者が一緒にやるものではない――一緒にできると思う

否定的なイメージを「1」とし、肯定的なイメージを「5」として、考えに最も近い番号に○をつけるように指示した。

事前調査ではさらに、「あなたは障がい者スポーツを観たことがありますか？」という設問に対して、「1.試合会場で観戦したことがある」、「2.TVで観戦したことがある」、「3.これまで観たことがない」の選択肢から、複数回答法により回答を得た。また、「あなたは障がい者スポーツを体験したことがありますか？」という設問に対しては「1.ある」と「2.ない」の二者択一とし、「1.ある」と回答した者に対して「a.学校の授業で体験した」、「b.体験イベントに参加した」、「c.その他」とともに体験した種目の自由記述を求めた。

事後調査では、「今後、アンプティサッカーのイベントがあったら参加してみたいですか？」という設問に対して、「1.ぜひ参加したい」、「2.都合が合えば参加したい」、「3.あまり参加したくない」、「4.参加したくない」、「5.わからない」の選択肢から、単一回答法により回答を得た。

⑵ データ分析

アンケート調査は、質問項目ごとに単純集計を行い、度数とその割合を求めた。また、事前調査と事後調査の比較には、対応のある*t*検定を実施した。

3．イベントに対する感想文

⑴ データ収集

イベントに参加した学生のうち、「スポーツ指導論（3年次後期開講・コース選択科目）」を履修した学生を対象に、ポートフォリオを介してイベントに対する感想を求めた。その結果、28名から提出が得られた。なお、スポーツ指導論の履修者を対象者として選別した理由としては、授業のねらいや学習内容が本イベントの趣旨が合致していると考えたためである。以下に授業のねらいを示す。

・スポーツの指導者・コーチとはどうあるべきか、コーチングも現状と課題の学修等を基礎として、スポーツの指導・コーチングの具体的な方法を身につける。現在、スポーツ活動に関する科学は、他分野に及び、対象と目的に合わせて安全に指導を行う上で必要な知識を指導者は習得する必要がある。スポーツ諸科学の知見を実際の指導現場で活用できる能力を身につけることを目的とする。

⑵ データ分析

得られた感想文は、KH Coder 3を用いて定量評価を行った。KH Coderとは社会調査のために用いられている計量テキスト分析ソフトの1つである。本ソフトは、データを多変量解析し、対象とする文書や回答にどんな言葉が何回出現していたのかを調べ、クラスター分析や共起ネットワークなどの多変量解析を行う機能を備えたものである（樋口［2014：21］）。本研究では、用語の出現回数を求めた。また、感想文の質的評価として、修正版グラウンデッド・

セオリー・アプローチ（木下［2007：1-10］）を参考に、概念の生成とカテゴリー化を行った。具体的な手順としては、感想文を読み込み、文脈や句読点から一つの意味のまとまりごとに分け、そのまとまりに対して概念を当てはめていき、すべて概念化し終えた後、複数の概念を説明するより抽象度の高いカテゴリーとしてまとめた。なお、概念生成およびカテゴリー化を進めるにあたっては、小学生の障害理解を目的としたアダプテッド・スポーツ授業の開発に向けて自由記述の感想文を同手法にて分析した研究結果を参考にした（大山［2018：13］）。

Ⅳ　教育効果の検討結果

1．事前・事後調査

事前調査（n＝64）において、障がい者スポーツの観戦経験を聞いたところ、「これまで観たことがない」が50.0％であった。「TV で観戦したことがある」と回答した人の割合は45.3％で、競技種目としては車いすバスケ12人、陸上競技９人、競泳・水泳４人、アーチェリー３人という結果であった。「試合会場で観戦したことがある」と回答した人の割合は12.5％で、競技種目としては陸上競技５人、アーチェリー３人、車いすバスケ２人、車いすテニス１人、競泳１人であった。

「これまでに障がい者スポーツを体験したことがありますか？」という問いに対して「ない」と回答した者が82.8％と大半を占めた。「ある」と回答した17.2％（11人）のうち、６人がアンプティサッカーの体験者であった。その他、シッティングバレー３人、ボッチャ１人、車いすバスケ１人であった。

障がい者スポーツに対するイメージについて、事前調査と事後調査において対応が可能であった57名の結果をもとに、イベント前後でのスコアを比較した（表１）。事前調査で最も平均点が高く、肯定的なイメージを持っていた項目が「④スポーツを行う意味がない―とても意味がある」で4.53±0.50点であった。一方、否定的なイメージを持っていた項目は「⑦スポーツをするのは難しいこと―簡単なこと」で2.61±1.03点であった。事後調査では、「①大勢で楽しめない―大勢でも楽しめる」が最も平均点が高かった（4.88±0.11点）。一方「⑦スポーツをするのは難しいこと―簡単なこと」が最も平均点が低かった（3.33±1.55点）。事前調査と事後調査を比較すると、すべての項目で事前調査よりも事後調査において高値を示し、両調査の間に有意な差が認められた（$p<0.01$）。特に、事前調査と事後調査での平均値の差が大きかった項目は、「①大勢で楽しめない―大勢でも楽しめる」（$t(57)=-7.419, p<0.01$）、「⑥できることが限られてしまう―工夫をすればいろいろできる」（$t(57)=-6.735, p<0.01$）で、事前調査に比べて事後調査において平均値が0.94-0.99点アップした。

事後調査において、今後、アンプティサッカーのイベントがあったら参加してみたいですか？」に対して、「ぜひ参加したい」が37.3％、「都合が合えば参加したい」が58.2％と、参加に意欲的な回答が95.5％

表１　障がい者スポーツへのイメージについての事前および事後調査の結果

	事前調査	事後調査	*F* 値	*t* 値	*p* 値
①大勢で楽しめない―大勢でも楽しめる	3.88±0.97	4.88±0.11	1.558	−7.419	0.001
②技術向上は望めない―技術向上もある	4.39±0.81	4.79±0.31	1.558	−3.712	0.001
③見ていてもつまらなさそう―おもしろそう	4.21±0.63	4.84±0.21	1.558	−6.834	0.001
④スポーツを行う意味がない―とても意味がある	4.53±0.50	4.81±0.23	1.558	−3.140	0.001
⑤スポーツを行うのは危ない―危なくはない	2.91±0.83	3.63±1.06	0.642	−4.501	0.001
⑥できることが限られてしまう―工夫をすればいろいろできる	3.72±1.06	4.63±0.45	1.558	−6.735	0.001
⑦スポーツをするのは難しいこと―簡単なこと	2.61±1.03	3.33±1.55	0.641	−3.994	0.001
⑧スポーツをやるべきではない―積極的にやるべき	4.19±0.77	4.68±0.40	1.558	−4.375	0.001
⑨スポーツをする環境が作れない―環境を作ることができる	3.88±0.93	4.47±0.65	1.558	−3.774	0.001
⑩健常者が一緒にやるものではない――一緒にできると思う	4.16±0.92	4.81±0.27	1.558	−5.729	0.001

であった。一方、「あまり参加したくない」が1.5%、無回答が3.0%という結果であった。

2．イベントに対する感想文

定量評価の結果として、表２にイベントに対する感想文において出現回数が多かった上位20語をまとめた。上位20語を品詞ごとにみると、名詞の「スポーツ」「障害」「アンプティサッカー」「選手」「人」「健常」「自分」「サッカー」とともに、サ変名詞の「体験」「プレー」「努力」「経験」が多く使用されていたことがわかる。また、動詞では「思う」「感じる」「知る」「持つ」が、形容詞では「難しい」「楽しい」が多かった。

質的評価の結果、６つの【カテゴリー】に分けることができた（表３）。はじめに、「初めて障がい者スポーツを体験した」や「貴重な経験ができた」といった【体験・経験の受け止め】が確認された。次に、「アンプティサッカーの難しさを実感した」や「アンプティサッカーについて理解できた」といった【アンプティサッカーに対する理解の深まり】、また、【アンプティサッカー選手への共感・尊敬】が挙げられ、この２つのカテゴリーの出現数が多かった。その他、「自分自身も頑張りたい」や「今の自分自身の環境に感謝したい」といった【自分自身の競技等の振り返り】が確認された。さらに、感想文の後半では【スポーツに対する理解の深まり】と【今後の意欲】が挙げられ、この２つのカテゴリーの出現数が【アンプティサッカーに対する理解の深まり】や【アンプティサッカー選手への共感・尊敬】に次いで多かった。

Ⅴ　教育効果の検討に関する考察

本稿の目的は、2018年度に実施したアダプテッド・スポーツ教育の活動報告と、その教育効果を検討することであった。ここでは、障がい者との交流機会を設ける取り組みにおける教育効果を、事前・事後調査による障がい者スポーツに対するイメージの変化と、体験に対する感想文から考察し、今後のアダプテッド・スポーツ教育の展開方策について検討する。

1．障がい者スポーツに対するイメージの変化を基にした教育効果の検討

障がい者スポーツへのイメージについては、事前調査と事後調査の比較から、アンプティサッカー体験会を通して肯定的なイメージへと変化したことがわかった。この結果は、我々が2017年度に開催したアンプティサッカー体験会での調査結果（宮本ら［2018］）ならびに障がい者スポーツイベントへの参加者や障がい者スポーツボランティアの従事者に対する意識調査の結果と類似するものであった（山田［2006：18］，西垣ら［2012：58］，大山［2017：274］）。山田［2006：18］は、意識の変容の程度は、障がい者との空間的・関係的な近接性の違いによって異なり、障がい者と直接的に関係を持つ機会が多いほど、プラスの効果があることを明らかにしている。今回

表２　イベントに対する感想文において出現回数が多かった上位20語

抽出語（１～10位）	出現回数
スポーツ	88
思う	72
障害	63
アンプティサッカー	54
感じる	35
体験	34
選手	32
人	31
健常	30
自分	30

抽出語（11～20位）	出現回数
今回	26
実際	23
サッカー	22
知る	22
プレー	20
難しい	19
持つ	18
努力	16
楽しい	15
経験	14

表 3　感想文のカテゴリーおよび概念とその具体例

カテゴリー	概念	具体例
1　体験・経験の受け止め	初めて障がい者スポーツを体験した	・今回のアンプティサッカーの体験が障がい者スポーツ初体験だった。 ・今回、はじめて障がい者スポーツを体験することが出来て、楽しもうと思ってのぞんで、実際にアンプティサッカーを純粋に楽しむことができた。
	貴重な（有意義な）経験ができた	・貴重な経験ができて本当に良かった。 ・今回やってみて、アンプティサッカーは健常者も障がい者も関係なく楽しめていたのでとても素晴らしい企画だなと思った。
2　アンプティサッカーに対する理解の深まり	アンプティサッカーの難しさを実感した	・片足が使えないということと、クラッチの使い方があまり上手くできなかったため、サッカー経験者の自分もあまり上手くサッカーをすることが出来なくて、少し悔しい思いをした。 ・率直な感想として、とても難しかった。普通にサッカーをしたり片足でバランスをとるのはとても簡単だが、クラッチを持ってやるだけで、バランスを取りながらボールを取ったり、蹴ったりすることがこんなにも難しくなるということがわかった。
	アンプティサッカーについて理解できた	・今回は、アンプティサッカーについてどんなスポーツでルールなのか、どんな障害を持っている人がするスポーツなのかを知ることができた。
3　アンプティサッカー選手への共感・尊敬	選手に共感した	・障害がある人でも健常者でもスポーツをする上で努力することは一緒だと思った。 ・本日の講話を聴き、障害を持っている人がどのような気持ちで、どのような目標を持ち、アンプティサッカーに、スポーツ競技に向かい合っているのかを学び、考えさせられることが多かった。
	選手を尊敬する	・アンプティサッカーの選手たちは元々サッカーをしている人も経験者じゃない人もいた。経験者の人はいろいろな理由でサッカーを続けられなくなったのに、夢を諦めずにアンプティサッカーという形でサッカーを続けていることがすごいと思った。コンプレックスだったりするはずなのに、自分に自信を持っていたのでとてもかっこよかった。
4　自分自身の競技等の振り返り	自分自身も頑張りたい	・私も負けないように練習をしっかりしようと思う。
	今の自分自身の環境に感謝したい	・私たちがいま普通に競技をしていることを当たり前と思わずに、競技ができていることに感謝しながらしっかり練習に取り組みたいと思う。
	自分自身の競技に置き換えて考えた	・初めて使う慣れない道具にある程度慣れさせる為に、必要な動きを選手が見本を見せてから体験者にしてもらい、徐々に複雑な動きを練習させているのを見て、自分がしている競技の体験会でも取り入れられたらと思った。
5　スポーツに対する理解の深まり	スポーツに対する理解が深まった	・健常者だけではなくスポーツはだれでも楽しめるということがわかった。 ・ルールを考えたり、工夫したりすることで健常者も一緒に入ってプレーすることができるのではないかと考えた。 ・スポーツは人の力になれるという、そのスポーツ自体の力に感動した。
	興味関心が広がった	・この体験を行って他の障がい者スポーツにも興味が湧いた。
6　今後の意欲	今後、障がい者スポーツに関わりたい・取り組みたい	・今後もこのような障がい者スポーツと関わる機会があれば積極的に参加しようと思った。 ・もしできるのであれば、学校教育において既に障がい者スポーツとして作られている壁を崩し、学校体育でアンプティサッカーのようなスポーツを取り扱い、そういった思いをする人がないような環境を作りたい。 ・将来的には選手の指導だけではなく、こういった企画を運営したり、スポーツの普及ができるようになれればいいなと思った。
	今後、障がい者スポーツを伝えていきたい	・将来、自分が教員としてスポーツと関わっていく中で、今回の経験、知識を自分の財産として子ども達に伝えることができたらとてもいいなと思った。
	障がい者スポーツに興味・関心を持っていきたい	・これから2020年には東京パラリンピックが開催されるがアンプティサッカーは正式競技ではないが、他の競技にも目を向けて障がい者スポーツをさらに知っていきたいと感じた。

のイベントでは、アンプティサッカー競技者から実技指導を受けた後、チームメイトとして交流戦を共に戦うなど、障がい者と参加学生との関係が非常に近いものであった。アンプティサッカー競技者と同じピッチに立ち、ボールを蹴りあったことで、「大勢でも楽しめる」ことや「工夫をすればいろいろできる」ことを実感したことが推察できる。

2．イベントに対する感想文を基にした教育効果の検討

イベントに対する感想文をみると、【アンプティサッカー選手への共感・尊敬】が窺えた。多くの学生にとって、今回のイベントが障がい者スポーツを初めて行う、あるいは、障がい者スポーツの選手と初めて交流する機会であったことが感想文より読み取れる。今回のイベントで選手と実際に交流したことにより得られたことが多かったことが窺える。また、アンプティサッカーの体験を通じて「アンプティサッカーの難しさを実感した」ことで、アンプティサッカー選手のプレーの凄さ（技術の高さ）に対する尊敬と楽しくプレーする選手への共感が高まったと推察できる。なお、この【アンプティサッカー選手への共感・尊敬】のカテゴリーは、感想文の質的評価の参考にした大山［2018］の【障がい者に対するイメージの変容】のカテゴリーと類似するものと考えられる。大山［2018］の【障がい者に対するイメージの変容】のカテゴリーには、下位の概念に「選手への賞賛」と「障がい者に対する認識の変化」を含んでいる。本研究では、アンプティサッカー選手から直接指導を受けたこともあり、学生がアンプティサッカー選手を障がい者として認識したというよりも、選手あるいは競技者として認識していたことが窺えたため、カテゴリーを【アンプティサッカー選手への共感・尊敬】とした。

【アンプティサッカーに対する理解の深まり】については、大山［2018］と同様に、体験した競技の難しさを実感したとする感想が多く確認された。感想文には、実際に体験してみると、ルール説明や動画視聴だけでは想像できなかったクラッチ操作や片足のみでのプレーの難しさを実感したとの意見が多かった。

本研究の結果、カテゴリーとして【スポーツに対する理解の深まり】と【今後の意欲】が挙げられたことも、注目すべき点の１つといえるだろう。大山［2018］の研究ではこれらに類似するカテゴリーは生成されていない。この相違は、対象者の年齢と授業者が競技者本人であったか否かが影響していると考えられる。大山［2018］の研究では、著者自身が授業者となり、小学校４年生に対して授業を実施した際の感想文の分析を行っている。一方、本研究ではスポーツを専攻する大学生を対象に、アンプティサッカー選手による実技指導とトークセッションを行った際の感想文を分析している。本研究では、「健常者だけではなくスポーツはだれでも楽しめる」や「ルールを考えたり、工夫したりすることで健常者も一緒に入ってプレーすることができる」など、スポーツへの理解がより深まったものと推察できる感想が多く確認された。今回のイベント内では、アダプテッド・スポーツの概念についての説明等は行っていないものの、参加した学生は体験の中から、“障害のある人がスポーツを楽しむために、その人自身と、その人を取り巻く人々や環境を問題として取り上げ、両者を統合したシステムづくりこそが大切である（矢部［1997：17］）”ことを実感したといえるだろう。この気づきには、これまでの学修も影響していると推察される。今回、イベントに対する感想の対象者は「スポーツ指導論」を履修する３年生であった。その多くが、競技者としてだけでなく、スポーツを指導する立場も経験した学生であった。そのため、自分自身の競技経験やこれまでの学びを基にしながら、障がい者スポーツについて考えたことがわかる感想がいくつも確認できたといえるだろう。

ここで、特徴的なもの１）～３）を紹介する。

１）今回、はじめて障がい者スポーツを体験することが出来て楽しもうと思ってのぞんで、実際にアンプティサッカーを純粋に楽しむことができた。その中で、もうちょっとこうした方がいいかなとか、こうしようということが沢山見えてきて、奥が深いスポーツだと感じたし、サッカーとアンプティサッカーは全然違う種目だと強く感じた。また、障がい者スポーツとか健常者スポーツとか言っているのを聞いて、そこに見え

ない壁があるのかなと疑問に思った。個人的な勝手な意見としては、大きなくくりとして障がい者スポーツや健常者スポーツがあるとしても、障がい者が健常者スポーツの選手になったり、健常者が障がい者スポーツの選手になったりすることができないのかなと思った。もし、現段階で不可能なことなのであれば将来的には障がい者とか健常者とかいう概念をなくして、皆でスポーツに向き合う、楽しくプレーし合う、勝利を目指し合う、そういうスポーツチーム（リーグ）を見たいと思った。

2）選手が常に「アンプティサッカーを広められるように」ということを口にしていて、その理由としてはそれぞれの選手が何個も持っていると思うが、特に体験会での選手の顔はとても輝いていて、人とスポーツをするのが好きなんだなと感じた。全国に9チームしかないアンプティサッカーは当然競技者人数も少ないわけで、障がい者スポーツとして認識されているため、障害を持っていない人たちからするとやはり入りにくい世界ということもあり、そういった壁がこの体験会では取れる。そういったことが楽しさなのかなと思った。もしできるのであれば、学校教育において既に障がい者スポーツとして作られている壁を崩し、学校体育でアンプティサッカーのようなスポーツを取り扱い、そういった思いをする人がないような環境を作りたい。

3）今回の講演会全体を通して、「スポーツっていいな」と強く感じた。生まれつき体が不自由だった方、事故や病気などで体が不自由になった方、様々な障がい者の方がいらっしゃると思うが、そのような人たちは、一度は必ず深い闇に落ちたことがあると思う。なぜ動かないのか。なぜ無いのか。健常者には想像もつかないような辛い思いをされることが必ずあったと思う。けれど、今回の講演会に参加してくださったアスリートの方たちと対面した時、一切そのような感覚を覚えることはなかった。きっとそれは障がい者スポーツというスポーツに関わることで、仲間ができ、目標ができて、それに向かって皆で頑張れる生きがいのようなものに障がい者スポーツがなっているのではないかと感じた。スポーツは人の力になれるという、そのスポーツ自体の力に感動した。それと同時にもっと健常者と同じ環境同じ立場でスポーツができるようにしていかなくてはならないと感じた。まだ健常者が行うスポーツと障がい者スポーツとの間には大きな壁があるように感じる。このような隔たりが無くなればもっと障がい者の方もスポーツに挑戦する機会が増えていって、生きがいにつながるのではないかと感じた。

3．今後のアダプテッド・スポーツ教育の展開方策

本研究の結果から、障がい者スポーツの体験ならびに選手との交流は、スポーツを専攻する学生にとって、スポーツの価値や現在のスポーツ教育あるいはスポーツ活動の在り方を問い直す貴重な機会となることがわかった。現在、障がい者スポーツの競技の高度化への対応や、指導者の担い手を広げていく中で、一般のスポーツの指導経験者が障がい者スポーツの指導を行うことが増えつつあり、一般のスポーツの指導者やスポーツ関係者に対して、障がい者スポーツの指導方法や、競技の普及を行う動きが注目されている（堀内［2016：134］）。今後の障がい者スポーツの更なる普及と発展のためにも、スポーツを専攻する学生が、スポーツに対する理解を深め、障がい者スポーツについても好意的かつ自発的に考える機会が必要といえる。また、実際に障がい者と共にスポーツをする際や指導する際には、安全管理等を含めた障害に対する知識と理解が求められるが、中村［2011］も指摘している通り、自分たちとは異なる特別な存在として障害を理解してしまうと、スポーツの価値が半減しかねない。定型的な指導や対応だけに捉われず、それぞれの状況や関わりの中で柔軟にルールや場を創造していくことを理解しておくこと、また、そのような姿勢を備えておくことが重要といえる。そのためにも、スポーツを専攻する学生たちに、スポーツを実施する際にそれぞれの人が抱える困りごとや課題を共有し、それらの解決を図りながら、皆でスポーツを楽しむ経験や機会を提供することが重要になるだろう。さらに、パラリンピックに含まれない競技種目や障害種の人々のスポー

ツなど、障がい者スポーツ内にも関心の格差が生じていることが問題視されている（笠原［2016：10］）。これらの課題も踏まえ、スポーツを専攻する学生に対しては、オリンピック・パラリンピック教育のみならず、幅広い視点に立ち、さまざまなアダプテッド・スポーツの体験と障がい者との交流を図っていく必要があるといえるだろう。また、オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議［2016］の報告書内に、「体育教員をはじめとする教育養成に関わる学部や課程等においては、オリンピック・パラリンピックへの理解のみならず児童生徒への指導方法等も含めた教育の充実を図ることが求められる。」との記載があることから、次年度以降、スポーツを専攻する学生がアダプテッド・スポーツの体験会や障がい者との交流会の企画・運営に携わる機会を作っていければと考えている。

Ⅵ　さいごに

アダプテッド・スポーツを通した学びにより、運動能力や体格の異なる児童・生徒・学生への理解、個性を尊重した他者との協調性やインクルーシブな視点を育むことが期待されている。実際に、アダプテッド・スポーツを用いた大学体育授業によって、自らの思いや考えを相手に伝える「自己開示」、友人らとの協力や励まし合いをする「他者協力」、未経験のプレーや技に挑戦して成し遂げる「挑戦達成」、友人らとスポーツそのものを楽しむ「楽しさ実感」が高まることが報告されている（佐藤［2019：206］）。また、授業後に受講生の「対人スキル」獲得レベルが向上することが示されている（佐藤［2019：207］）。さらに、佐藤［2019］は、大学体育の意義や役割に対して議論がなされている社会的背景を踏まえ、アダプテッド・スポーツを大学体育において教材として活用することの有効性を説いている。本研究においては、スポーツを専攻する学生に対するアダプテッド・スポーツ教育の活動報告と効果の検討を行ってきたが、今後はさらに対象とする学生の幅を広げ、検討していく必要があるだろう。

謝　辞

アンプティサッカー体験会の開催にあたりご協力いただいた特定非営利活動法人日本アンプティサッカー協会ならびにFC九州バイラオールの関係者のみなさまに心より感謝申し上げる。なお、本研究は平成30年度 長崎国際大学学長裁量経費（科研費チャレンジ）の助成を受けて行った。

参考文献

大山祐太（2017）「大学の一般体育におけるアダプテッド・スポーツ実践の教育効果」『北海道教育大学紀要（教育科学編）』Vol. 67, 267-276頁.

大山祐太（2018）「小学生の障害理解を目的としたアダプテッド・スポーツ授業の開発」『アダプテッド・スポーツ科学』Vol. 16（No.1), 7-20頁.

オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議（2016）「オリンピック・パラリンピック教育の推進に向けて最終報告」

笠原亜希子（2016）「知的障害者スポーツのメディア報道に関する研究―スペシャルオリンピックスの新聞報道を事例として―」『アダプテッド・スポーツ科学』Vol. 14（No. 1), 9-23頁.

木下康仁（2007）「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）の分析技法」『富山大学看護学会誌』6(2), 1-10頁.

小林尚平，平賀慧（2018）「日本におけるパラリンピック教育の動向とその教育的効果：IPC公認教材「I'mPOSSIBLE」を事例に」『日本財団パラリンピックサポートセンターパラリンピック研究会紀要』85-114頁.

佐藤紀子（2019）「「アダプテッド・スポーツ」を用いた大学体育授業が初年次学生のライフスキルおよび自己肯定感に与える影響」『総合文化研究』第24巻 第1.2.3号合併号，195-219頁.

産経ニュース（2018年2月24日）「パラリンピックの成功なくして、東京大会の成功はない」『特集 小池百合子知事定例会見録』
https://www.sankei.com/smp/politics/news/180223/plt1802230033-s1.html（2020年1月10日閲覧）

塩田琴美，徳井亜加根（2016）「障がい者スポーツにおけるボランティア参加に影響を与える要因の検討」『体育学研究』第61巻，149-158頁.

曽根裕二（2016）「アダプテッド・スポーツの体験が体育専攻学生の障害理解に及ぼす影響」『大阪体育大学健康福祉学部研究紀要』第13巻，53-62頁.

中村義之（2011）「障害理解の視点―「知見」と「かかわり」から―」『佛教大学教育学部学会紀要』第10号，1-10頁.

西垣景太，上田ゆみ子，藤丸郁代，伊藤守弘（2012）「障がい者スポーツイベントの学生への教育的効果―障害者に対するイメージの変化及びコミュニケーション能

力への影響―」『中部大学教育研究』No.12，55-58頁.
日本アンプティサッカー協会ホームページ．〈http://j-afa.jp/〉
樋口耕一（2014）「社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して」株式会社ナカニシヤ出版．21頁.
堀内雄斗（2016）「パラリンピックと障害者スポーツ―現状と課題―」『総合調査「2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けた諸課題」レファレンス』平成28年2月号，127-147頁.
宮本彩，元嶋菜美香，元安陽一，田井健太郎，熊谷賢哉，宮良俊行（2018）「スポーツを専攻する学生のためのアダプテッド・スポーツ教育の充実をめざして」『長崎国際大学教育基盤センター紀要』第1巻，81-89頁.
矢部京之介（1997）「特集／もう一つのオリンピック 日本の3月、パラリンピック：アダプテッド・スポーツの提言」『ノーマライゼーション 障害者の福祉』1997年12月号，17-19頁.
矢部京之介（2004）「序論 アダプテッド・スポーツとは何か」『アダプテッド・スポーツの科学～障害者・高齢者のスポーツ実践のための理論～』市村出版．3頁.
山田力也（2006）「障害者スポーツボランティア活動者の意識変容と役割構造に関する研究」『永原学園西九州大学・佐賀短期大学紀要』37，11-18頁.